

【研究ノート】

逸脱するテキスト

—オスカー・ワイルド「幸福な王子」と教科教育—

Beyond the Frame:  
Appreciating Oscar Wilde's "Happy Prince" Outside EFL Classrooms

西山裕子\*

NISHIYAMA, Hiroko\*

要旨

オスカー・ワイルドの短編「幸福な王子」は、小学校で道徳の教科書に掲載されるなど、児童が物語に慣れ親しみ、道徳的思考を深めるための教材として使われている。しかしながら、ここでの「読み」は、あくまでも、「道徳」教育の一環としてのみに限定されるものであり、物語が従来のテキストから切り離されて解釈され、使用されているにもかかわらず、原文から離れることによって生じる解釈上の誤謬について指摘がなされてこなかった。英語文学の視座から物語と道徳教育とを結びつけると、端的に言えば、「特別の教科 道徳」に導入されるときには、学習のめあてに沿う形で大幅に改編がなされており、短編小説の一部だけが切り取られ、教科のなかに取り込まれている。英語圏の文学作品が文学教材として果たす役割についての議論は別として、教科教育で英語文学作品を取り上げるときに生じる問題は、改稿された文学作品を教室で使うことに対する議論が十分になされてこなかった点にある。本稿では、作品の背景を振り返り、道徳の授業で指導されている「幸福な王子」とワイルドの手になる原文とを照らし合わせながら、物語の「空白」を英語文学教育の観点から読み解き、教科教育における英語文学作品の意義を検証する。さらに、英語文学作品がより適切に教科教育に溶け込むようにテキストのさまざまな解釈を引き合いに出しながら、教科指導における英語文学作品の方向性について検討する。

キーワード：英語圏の文学、英語児童文学、童話、教科教育、オスカー・ワイルド

1. 序——英語文学と教科教育

日本の初等教育や中等教育において、学習指導要領の改訂が繰り返しておこなわれているものの、英語文学作品が教科や外国語科(英語)の教科書に取り上げられる割合は減少の一步を辿っている。日本英文学会では、2017年に関東支部に所属する英語圏文学の研究者たちが著した論文集において、「[英語]文学を教室に持ち込み、授業計画などと称して、作品の結末を予め想定したような扱いをすることは、かえって文学の魅力をそぐことになりはしないか」という懸念を示しながら、文学に含意される役割を次のように述べている(原田, 2017)。

文学は、人間の知性や感性、観察や観念、情緒や決意といったものをさまざまな容態を取って映し出す。個々の作品と一人一人の読者が取り結ぶ関係もきわめて多様だ。同じ文章を読んで異なる印象や解釈が生じることを文学はさまたげない。だが、そうした文学の豊かな可能性は、読者個々の内面的経験のうちに埋没してしまうことも少なくない。

英語という言葉のいわば、国際共通語としての役割が根強い今日においては、斎藤(2017)の指摘にみられるように、70年代に日本に導入されたコミュニカティブ・アプローチなどの指導法のアンチテーゼとして文法・訳読を中心とした教授法は否定され、文学作品が教材として果たしうる価値も否定されることとなった。久世(2011)もまた、「かつて日本の英語教育において中心的な役割を果たしてきた文学教材は、次第に周縁化され、その利用を正当化することは現在しばしば難しい状況にある」と論じる。しかしながら、物語を読み、愉しむという行為や、英語で書かれた物語が読者に影響を与えうる可能性を鑑みると、読書体験を「読者個々の内的経験のうち」に埋もれるままにまかせておくのではなく、読者の体験を可視化するための一助とすることも一案なのではないか。

文学作品の教材としての役割に言及する数多くの議論には、まだ触れられていない点が残されている。文学作品は、広義において、英語学習のためだけにあるのではない。むしろ、学校教育では、英語が母語の場合には「国語」の教材として、多様化している価値観が混在する現代社会において、自己をみつめ、物事を多面的・多角的に考えて、

\* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

自己の生き方について考えを深めて内省へと導く多義的な教材として活用されうるであろう(文部科学省,2018)。年々、英語学習が早期に行われつつある現状を踏まえると、教材としての英語文学作品の流れを義務教育の「源流」にまで辿り、「教室で」文学作品に触れる学習者の対象を大学生から高校生へ、さらには、中学生へ、さらにその先の、小学生にまで遡ると、英語学習という観点を離れて、物語そのものの導入方法に重きをおき文学作品を教室に持ち込み、授業計画に組み込むことの意義を探り当てることが可能になるように思われる。

本稿では、このような仮説をもとに、従来の外国語教育における文学教材の役割に関する議論から距離をおき、教科教育で取り上げられている文学作品の意義を、物語の空白、解釈における誤謬、教科指導と英語文学教育という視点から分析し、物語の「空白」の意味に関する学生による考察を交えながら、英語文学作品を初等教育で取り上げる際の課題や指導の方向性を指摘する。

## 2. イギリス文学史にみる「幸福な王子」——ワイルドと芸術

小学校で児童が——おそらく、英語文学作品であることに気がつかないうちに、という前振りをあえてしておくが——慣れ親しむことのできる物語が、アイルランド出身のオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の短編「幸福な王子」(“Happy Prince”, 1888)である。

この物語は、小学生の読み物では、「児童文学」のジャンルに準えられるが、ワイルドは児童文学作家というよりはむしろ、19世紀後半の、世紀末を代表する英語圏文学の作家のひとりであり、数々の作品を遺している。

19世紀の終わりは、ヴィクトリア女王(在位 1837～1901年)の老齢期にあたるが、当時、イギリスは、1837年にヴィクトリア女王が18歳で即位してから、1850年代には産業の著しい発展やインドの植民地化がみられ、さらに、翌年1851年には大英帝国の繁栄を世界に轟かせた、大英博覧会といういわば、国力を象徴する、国を挙げたイベントがおこなわれていた。成瀬(2004)が指摘するように、「ヴィクトリア朝時代には個人の道徳的資質を重視する風潮がおこった」ことは、「幸福の王子」の根底にあるテーマを読み解く上で重要な鍵となる。

ところで、著者ワイルドに関していえば、このような歴史の流れを経たイギリス文学史での位置づけでは、彼はデカダンスと結びついているとはいえないまでも、唯美主義や芸術至上主義が流行した世紀末を代表する作家であるとみなされている(橋口, 1983)。代表作は、唯一の長編『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891)であると目されているが、彼は短編や長編の他、戯曲『サロメ』(*Salomé*, 1893)をはじめとして、詩や評

論、芸術論、社会主義論、風習喜劇など多岐にわたって幅広く執筆活動をおこなった。

とりわけ、日本の初等教育において、彼は、童話作家であるかのように取り扱われる傾向にあるが、物語を授業で扱う教師は彼が著した短編について語るとき、彼の作品を彩る芸術家としての源泉は、イギリス文学の歴史の流れに組み込まれていることを念頭におかなければならない。そうすることで、学習のめあてを多角的に深めて指導することが可能になったり、教室での児童への教科指導の実践がより充実したものになったりすることが想定されるからである。

The artist is the creator of beautiful things. To reveal art and conceal the artist is art's aim. The critic is he who can translate into another manner or a new material his impression of beautiful things.... An ethical sympathy in an artist is an unpardonable mannerism of style. No artist is ever morbid. The artist can express everything. Thought and language are to the artist instruments of an art. (一重下線部と二重下線部は筆者による)

引用の下線部にみられるようにワイルド(Wilde, 1989)は、「彼の芸術観を具現化した作品の一つ」(梅津, 1992)である『ドリアン・グレイの肖像』の序文において、芸術家とは何者か、あるいは、芸術家は何を成しうるのかについて、あたかも自らの作品を批評するかのよう、次のように記している——「芸術家は美の創造者である」こと、「芸術の目的は、芸術を明らかにするが、芸術家であることは隠蔽する」こと、「芸術家はすべてを表現でき」、「芸術家にとって思考と言語は芸術の道具である」ことなど(抜粋)。同様に、引用の二重下線部では、批評家の役割は、「美しいものに対する印象」を別の様式や新しい素材へと変化させることができる人を示すと指摘している。

ワイルド独自のこのような芸術観や宗教観、さらには、小説家として船出するまでに関わっていたジャーナリズムの視点を含んだ批評家としての眼差しは、ワイルドが単に、児童文学作家だけでないことを裏付けている。

では、「幸福な王子」は、教科教育において現在の初等教育で取り上げられるまま、児童向けの「童話」として捉えられてよいのだろうか。実は、イギリス文学史上、ワイルドの短編集や童話は、後の長編の萌芽を多分に含みながらも、Erickson(1977, 53)が論じるように、“Happy Prince”, “The Canterville Ghost” (1887年2月・5月, “The Court and Society Review”に連載), “The Selfish Giant” (*The Happy Prince and Other Tales* に収録)と

いった短編は、「一世紀近くにわたって多くの子どもたちや大人によって認められ、根強く人気がある作品ではあるが、それでもなお、ほとんど批評家の注目を集めてこなかった」(... [T]o millions of children and adults for close to a century [they] ... bring a light of recognition that few of Wilde's other works can do. Still, in spite of their enduring popularity, Wilde's short stories and fairy tales have not drawn much critical attention)と評される。

数多くの翻訳が現存しているなかで西村(1968)は、この物語は「ワイルドの全童話中、もっとも有名で、もっともよく読まれており、その平明・簡素でありながら陰翳に富む格調の高い文章は全世界の子供たちに愛読されている、といっても過言ではないであろう」と述べ、井村(1989)は、ワイルドの二つの童話集、『幸福の王子その他の物語』と『ざくろの家』(A House of Pomegranates, 1991)を比較し、「前者のほうが筋も単一で、教訓的で、心情も子どもにちかいものがある」と指摘した上で、物語がキリスト教的な色彩が色濃く絵描かれていることに言及する。近年出版された翻訳のあとがきにおいて富士川(2020)は、「ワイルドは童話集から作品が一躍広く知られることになった」と述べて、貧しい者や虐げられた人々、弱者への同情、人間的な感情といったテーマやモチーフが、後年の作品におけるプロットの萌芽となっていることに触れるが、一見すると素朴であるかのように思われる彼の童話は実は、「子供のためであるとともに、(中略)大人のための童話」であるがゆえに広く「読みつがれていくことを願う」と、多数の研究者が引き合いに出して論じる、ワイルド自身の書簡を援用して、作品の多義性について触れつつ、翻訳のあとがきをしめくくる。曾野(2018)も、他の翻訳者と同様に、「この作品は世界の文学史の中できらりと光る頂点に立つ短編である」と言い切って、王子とつばめの関係に息をのみながら読者がのめり込むほど優れた作品であることに言及して、「この小説[が]子供向きのお話だと思っている読者がいたら、考えを改めてほしい」と語りかける。

一口に「童話」といっても、子どものための物語全体を指す場合や、「児童文学の同意語」として幅広く使用されている場合がある。また、グリム童話という表現にもみられるように、児童文学伝承の物語を示すなど、言葉の定義は多岐にわたっており、「童話」の捉えられかたに幅があることが窺える(三宅, 1999)。安達(2011)は、ワイルドの童話を口承の伝統的なおとぎ話としてではなく、アンデルセン(Hans Christian Andersen, 1805-75)やディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)を経てワイルドへと継承された「創作おとぎ話」(creative fairy tale)として位置づける。つまり、産業革命に伴うヴィクトリア朝社会の変

革を背景に、宗教と教育の分野での価値観の変化や無垢の象徴として子どもを捉える見方などにもおよぶ変容の流れのなかで「伸びやかな想像力を刺激する読みもの」の再評価やそこに隠されている象徴性といった解釈上の切り口にも着目するが、おとぎ話は必ずしも、ハッピー・エンディングではないことや、“fairy tale”の特徴のひとつに「型通りの幸せな結論に加えられた一捻り」があることなどを指摘する。

以上のように、ヴィクトリア朝社会の情勢にも触れながらワイルドの作品と解釈について概略をまとめてきたが、教科教育や指導の一環として物語を子どもたちと読むときに欠かせない文学上の技法があることも忘れてはならない。そこで、次の章では、「従来の伝記的・歴史的研究が、作品を時代背景に還元することで作品を説明しようとしたことに対する反動としてテキスト中心の読み方から生まれた」、いわば、作家と作品を切り離して読むニュー・クリティシズム(New Criticism)に倣った、作品それ自体の「自律的な」読みの実践の必要性があることを踏まえて(川口・岡本 1998)、作家と作品とを結びつけるという行為そのものを排除し、語り手<sup>イコール</sup>作家という構図を取り去り、プロットやストーリーに注目して教科教育における指導に向けて、物語の検証を重ねてゆく。

### 3. 「児童文学」から「道徳」へ

「幸福な王子」はなぜ、小学校の外国語科ではなく、道徳の授業で扱われているのか。この問いに対する答えは、ワイルドの作品に散見される宗教観や道徳的な(“Moral vision”)テーマに関係しているように思われる。言い換えれば、富士川(2013)の指摘にみられるように、この童話の核心には、「真の幸福とは愛他精神のうちに生きること」というテーマが据えられているものの、「ありきたりのキリスト教的人道主義のモラル」を論じている点では「大層現実離れした、感傷的で偽善的な匂いのするものであることは誰の目にも明らか」である。しかしながら、本作は、「慈善行為を実践することを通じて真に『幸福の王子』となった主人公が現代の読者に訴えかける」(傍点は筆者)という、心理描写が複雑に入り組んだ<sup>エクリチュール</sup>「言説」であるがゆえに、小学校の学習指導要領に基づく観点や学習のめあては、英語圏文学における従来の批評を踏まえた読みや解釈から逸脱してしまうといわざるをえない。

光文書院(2000)は、インターネット上で、小学校 2 年生『どうとく——ゆたかな ころ』の教科書に掲載されている「しあわせの王子」について、作品の筋立てを紹介しながら、他の出版社でも物語が扱われていることに触れて、次のようにまとめ、指導案を公開している。

表 1 各出版社における“Happy Prince”の掲載状況

学年	教材名	出版社	掲載頁
2年生	「しあわせの王子」	光文書院	156
2年生	「しあわせの王子」	廣濟堂 あかつき	108
2年生	「しあわせの王子」	教育出版	108
3年生	「幸福の王子」	学研みらい	132
3年生	「しあわせの王子」・同書、 別冊	学校図書	88, 42
3年生	「しあわせの王子」	東京書籍	128

光文書院では、表1の説明として、教科の指導者に向けて、各教科書に通じるストーリーの要約を掲載するが、注意書きに、「教科書の掲載文は、1時間枠の授業でまとまりをつけるように分量・内容が大きく改編されており、原作は「幸せ、愛といった普遍的で深いテーマ」を持つが、「教科書の掲載文では自己犠牲の物語となっている」という説明を添えている。

そもそも、「特別の教科 道徳」（本稿では「道徳科」と表記する）は、学習指導要領の全面改定により、平成27年4月から平成30年3月までの移行期を経て、平成30年度から全面実施となった教科である。指導計画では改善が求められたが、その結果として、全体計画や年間指導計画の見直し、学校としての指導方針の明確化が必要とされた。この年間指導計画の改訂内容に即して、本作が高学年の外国語科の授業や、のちの中等教育における英語学習への円滑な橋渡しとなる英語圏の文学作品となりうることを踏まえた結果として物語選定で選ばれたとすれば、本作の教科書への掲載は意味深い。以下は、浅見(2017)が指摘する、平成30年度から施行された新学習指導要領・年間計画に関する文言の抜粋である。

各学校においては、道徳教育の全体計画に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動との関連を考慮しながら、道徳科の年間指導計画を作成するものとする。（中略）その際、児童や学校の実態に応じ、二年間を見通した重点的な指導や内容項目間の関連を密にした指導、一つの内容項目を複数の時間で扱う指導を取り入れるなどの工夫を行うものとする。（下線部は筆者による）

当時の議論で重要な点は、浅見が指摘するように、教材は「児童の発達の段階に即し、ねらいを達成するのにふさわしいものであり、児童の道徳性を養うという観点から考えて、より大きな効果を期待できるという判断を前提として検討する」必要があることである。

数値による評価では計り知れない児童の関心や興味を

引き出し、「学習活動において児童がより多面的・多角的な見方」ができるように促すために、適する教材選定が移行期を経ておこなわれたことになるが、ワイルドの作品における宗教観や、ワイルドの芸術観を含んだ英語文学作品を小学校低学年から中学年で取り上げるためには、この物語のテーマが、道徳科で扱われている「自己犠牲」や「幸せのあり方」だけを主軸とした物語ではないことを指導者が理解しておく必要があるだろう。さらにいえば、各出版社が掲げている、「[自己犠牲という]美しいものに触れて感動すること」（学習指導要領・観点 D）に通じるように本作を用いて教科教育をおこなおうとすると、原文やテキストの意図から大きく離れてしまう点への理解も大切である。浅見(2023)は道徳の教科化から数年が経過した2023年に、さらに次のように言及する。

今、すべての教科等で主体的な学習が求められており、特別の教科 道徳（以下、「道徳科」とする）でも言えることである。道徳科の授業では、教師が特定の価値観を子供に押し付けたり、子供が指示通りに主体性をもたず、言われるままに行動したりすることは、目指す方向の対極にあるものである。人間としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考える姿勢が求められるのである。

繰り返していうが、「幸福な王子」の原作は、決して子どもだけに向けられたものではない。ワイルドの短編は、仮に児童文学というジャンルにおかれるとしても「物語を楽しませながら考えさせるという寓話」（富士川, 2019）であると同時に、グレマス(A. J. Greimas)、バルト(Roland Barthes)、ジュネット(G rard Genette)によって発展した一連の「物語論」(narratology)で取り上げられているように、架空の世界に現実社会と文化の鏡像関係を投影する、いわば、「社会のありようを明らかにし、社会の諸問題について高邁な思想を提示する」（横田, 2001）ものとして機能し続けている。さらに、教科教育においても「理屈抜きの判断、子供の直感に訴えかけるもの」（貝嶋, 2020）として捉えられうることを強調しておきたい。

#### 4. 教科書と原文との比較——物語篇

道徳の指導にあたる教師が、指導者として原文により忠実に理解を深めることができるように、以下、道徳科で指導されている「幸福な王子」と原文(抜粋)とを照らし合わせる。日本語の要約は、光文書院の公開情報によるものであり、原文の要約には、オスカー・ワイルドに関する研究書を用いた(Ericksen, 60-61)。なお、内容と場面の展開に関する分類は、筆者による。また、日本語の要約に相当する箇所は下線部で、また、解釈上重要な場面は波線部

で示す。以下の要約(和文)に記載がない逸話も、教科書に掲載されていることもあるが、特筆すべきは、学研(2023)のみが〈場面0〉「ほこりにしていた」や、〈場面4〉「みずぼらしい」という心情描写を掲載している点である。

#### 4-1. 〈場面0〉

教科書(要約)：掲載なし

The title story of the volume is about the statue of the Happy Prince, which stood high above the city on a tall column: “He was gilded all over with thin leaves of fine gold, for eyes he had two sapphires, and a large red ruby glowed on his sword-hilt.”

#### 4-2. 〈場面1〉

教科書(要約)：南国へ急ぐ一羽のツバメが、「幸福の王子」と呼ばれる銅像の足元で羽を休めていた。上から雫が落ちてくるので見上げると、王子が泣いていた。

One day a little swallow who had delayed his winter trip to Egypt because he had fallen love with a reed stopped to rest on the column. After several drops of water had fallen upon him, he looked up and saw that the statue was weeping. The swallow asked him why he was weeping, and the Happy Prince replied that until he had died and been placed high above the city he did not know of the misery in the world.

#### 4-3. 〈場面2〉

教科書(要約)：王子は身に付けている宝石を貧しい人へ届けるようツバメに頼む。ツバメは南国へ帰るのを遅らせ、王子の願いをかなえるが、そのうちに王子のそばに留まることを決意する。

The statue then asked the swallow to take the ruby out of his sword-tilt and give it to a poor woman whose little boy was sick with a fever. At the Prince's request the swallow agreed to remain one night longer and, although it was cold, he felt a little warmer after his task. The next day the swallow stayed to deliver one of the Prince's sapphire eyes to a poor writer who was so cold he could no longer write his play. The third day he took the last sapphire to a little match girl who had lost her matches. The little swallow decided to stay with the now-blind statue and tell him stories of strange marvels he had seen. But the prince told him that the suffering of man was more marvelous still and asked him to pick off the gold leaf and give it to the poor. The swallow did this and the poor were happy.

#### 4-4. 〈場面3〉

教科書(要約)：冬、王子には施す何物も残らず、つばめは息

絶える。(原文まま)

But the cold winter had come and the little swallow had just enough strength to kiss the Happy Prince and die. At that moment the leaden heart of the statue broke in two.

#### 4-5. 〈場面4〉

教科書(要約)：掲載なし

When the mayor and the town councillors saw how shabby the statue had become, they had it pulled down and melted. Because the heart would not melt, they throw it on the dustheap where the swallow was lying. (spelling as in the original)

#### 4-6. 〈場面5〉

教科書(要約)：そこへ天使が降りてきて、王子とつばめを天に運ぶ。(原文まま)

God then asked one of his angels to bring him the most precious things in the city. The angel brought the leaden heart and the little body of the bird. God decreed that “in my garden of Paradise this little bird shall sing for evermore, and in the city of gold the Happy Prince shall praise me.”

### 5. 教科書(要約)と原文(要約)との比較——考察篇

物語を6つの場面に分割してみると、和文と英文の要約で完全に省略されているのは、物語の冒頭と〈場面4〉で、王子の装飾が全て取り去られて、「黄金」の王子ではなくなったときに、市長たちが議論する場面である(ただし、教科書6冊すべてにおいて、〈場面0〉について、簡略化された説明はなされている)。

物語の冒頭は、向井(2010, 193-194)が指摘するように、読み聞かせのときに、音によって醸し出される「印象」を引き出すかのように、リズムカルな音が繰り返されており、子音で摩擦音、/h/の音とともに銅像となった王子の存在感を読者に伝える描写となっている。街を見下ろす王子は純金(fine gold)でできた金箔で覆われ、ルビーやサファイアの宝石が光り輝き、まるで玉座を想起させるような高い円柱の上にたっている。街の繁栄の象徴であるかのような、この銅像に、議員がつぶやく——「風見鶏のように美しい」と(このとき、議員は自分が「実利的で役に立つ」(practical)人物であること、それとは対照的に、王子が「実利的ではなく、役に立たない」(unpractical)ことを強調する)。母親は子どもを諭す——「ないものねだりをしてはいけないよ。幸福の王子様[の銅像]はおねだりなんかしていないでしょう」。語り手によれば、この母親は「良識ある」(sensible)人物だ。「有難いことに、この世の中には、幸福な人[王子の銅像]がいる」と呟くのは、「失望した」(disappointed)男性だ。有用性を重んじて、うわべ

だけの幸福を賛美し、「美しさ」を称賛する、この冒頭には、幸福の王子の銅像が建てられた街の実態を批判的に描き出す語り手の技法や、冒頭において、人間社会における当時の価値観を描き出そうとする試みがなされていることがわかる。

市民たちが住むこの共同体において、美しいものや金銭的に価値があるものだけが「素晴らしい」ものであり、人々に幸福をもたらすものであるとすれば、〈場面4〉は、どのように原文で描写されているのか。市長は、「なんといいことだ、なんてみすぼらしい」と言い、議員は常に市長の言いなりになっている人物であるが、「みすぼらしい」(shabby)と繰り返して、銅像に近寄ると次のように言い放つ——「[王子の銅像を見て]乞食同然じゃないか」(“Little better than a beggar”)と。ここでも、同じ意味を持つ言葉や文章、音が繰り返されていることで、二人の気持ちが強調される印象を読者に与えていることがわかる。そして、王子の銅像が引きずり下ろされると、市民(博識があり、権威の象徴として物語に登場する大学教授)が、銅像の「有用性」(原文では“practical”や“useful”といった表現が物語で繰り返し使われている)に触れる——「もはや[銅像は]美しくないで、役に立たない」(“As he is no longer beautiful he is no longer useful”)と。

次に、教科書では触れられていないが、道徳で取り扱われる「博愛の精神」や「美しいところ」、「思いやり」とは反駁する、ツバメに関するエピソードに触れておく。教科書では〈場面0〉からすぐ、〈場面1〉に移行するが、実は〈場面1〉では、原文にはツバメは王子に出会う前に恋愛譚がある。英語版の要約にもみられるが、ツバメは、自分の言葉で語るができない(この場面は、ジェンダーの視点から、女性が言葉や発話を奪われたことを象徴する逸話であると分析することもできる)葦に恋をする。葦は、「すらっとした腰つき」をしており、ツバメの求愛に対して「お辞儀をして」応えるが、結局ツバメは葦を一方的にふっ飛ばす——「お金もないし、身内も多すぎるし、会話もできないし、浮気者だし」(風がふくと風で葦が揺れ動くことを「浮気」と称している)、「一緒に旅行ができない」(葦〈象徴としての女性〉が自分の領域(domestic)にだけ目を向けていることを批判する)と。自分が弄ばれたと捉えて一方的に別れを告げるツバメの行為は、「博愛」や「思いやり」からはほど遠い。

では、王子はどうであろうか。教科書では、王子は、自らの体の一部を分け与えて自分の「美しさ」を犠牲にしてまで困っている民を救おうとする救済者であり、慈愛に満ちた人物として描かれている。しかしながら、〈場面1〉では生前の王子の、宮殿での逸話が省略されているし、この省略——いわば物語の「空白」——を経て、〈場面2〉への伏線となる語りの変化が十分に生かされないまま、

道徳では「心の美しさ」が強調されている。

王子は、かつては、憂いのない世界の象徴として描かれる「宮殿」(Sans-Souci)に住み、高く聳えた壁の向こうの世界(つまり、領民たちの現実と社会の現状)を見ることなく、あるいは見ようともせずに、「美しいもの」に囲まれて暮らしていたという。対照的に、銅像となって街を見わたす王子は、高い場所から、外界(「美しいもの」と対照をなす世界)に対峙することで、足元は固定されて動けないままではあるが、街の真実を知ることができるようになった。この状況下で王子は初めて「嘆き悲しむ」ことの本当の意味を知るのである。英語の要約文(場面2)では、12行目に“strange marvels”とあるが、原文では次のように示されており、王子が人間に対して抱く興味や哀れみの気持ちを代弁する場面となっている。

“Dear little Swallow,” said the Prince, “you[swallow] tell me of marvellous things, but more marvellous than anything is the suffering of men and of women. There is no Mystery so great as Misery. Fly over my city, little Swallow, and tell me what you see there.” (spellings as in the original)

ツバメに向けられた王子による懇願の場面では、引用下線部の“my”という言葉は、貧困に喘ぐ社会の内側から自国の民に寄り添う王子の意志を示す。また、その他の下線部に示される、“marvellous”, “There is no Mystery”, や“Misery”などの表現は、王子が塙の外側に出ることで、生活に困窮する人々の個々の苦しみを測り得ない(marvellous)ものとして捉えて、世の中のどの愉しみよりも理解したいと願う王子の決意を示している。

王子に寄り添おうとするツバメの気持ちを代弁するかのような、死を目前にしたツバメの王子との別れの〈場面3〉は同性愛を示すと指摘する研究者も少なくないが、ツバメの接吻は、現世に別れを告げるモチーフとして機能しており、続く〈場面5〉において、この行為はこの世で最も崇高なものとして天国で昇天する、キリスト教的な救済を予示するものであると論じることもできよう。

全ての場面において原文と要約では割愛されているという点で道徳の教科書では読み取ることができないが、原文との比較において注目すべき描写がある。原文では、作品冒頭にみられる「音の効果」は、ツバメと王子の心の交流の場面に受け継がれており、「幸福な王子」を悲哀のなかにも、子どもたちが物語に慣れ親しむ要素のひとつとなっているが、原文にみられる、王子によるツバメへの語りかけ(“Swallow, Swallow, little Swallow, ... will you not stay with me for one night, and be my

messenger?) は、教科書(和文)ではリフレインの効果を失っており、読者はリズムカルでダイナミックな言葉の動きを体感し、読み取ることができない。

授業で英語文学作品を扱うためには、将来的に教師を目指す学生たちが原文との「違い」をどのように感じ、読み取ることができるかという視点からの分析も、原作が英語で書かれた物語を用いた教科指導の方向性を探るための有用な手立てとなるであろう。そこで、本義論のまとめとして、小学校教諭第一種免許状を主免許として取得予定の学生 9 名による見解を踏まえて、別の角度から物語の「空白」の意味を考察する。

なお、学生による意見は、2024 年前期に、3 年次で開講されている「英語文学と日本」の授業において、原著を英語で読了したのちに、英語文学作品を教科教育に生かすための試みを議論する上でレポートの一部として集約したものである。レポートという性質上記名式ではあるが、内容の一部を抜粋して掲載するときには匿名とすることや、評価に関係しないことを含めて、履修生には事前に、本調査の趣旨を伝えており、掲載にあたっては受講生全員から承諾を得ていることを附記として申し添えておく(2024 年 7 月 27 日実施、自由記述方式、回答の下線は筆者による)。

5-1. 質問項目：「なぜ、『王子とツバメ』に関する一部の場面が、教科書では子ども向けの物語や映像では省略されているのでしょうか？この間について、『英語文学』と『英語教育』という視点から、あなたの考えを述べなさい(400 文字以上)」

5-2. 学生による回答(原文まま)：

・見たくないものは見ずに、表面上だけをさらっているように感じる。そこ[物語]から一部省略されているのは、物語をきれいなものとして扱っているからなのだと考える。

・物語の中でハッピープリンスが持つ悲しみや、貧困、社会不平等といったテーマは、子ども向けのコンテンツでは扱いにくい。

・原作は、幸せ、愛といった普遍的で深いテーマをもっているが、教科書は自己犠牲、思いやりの心がテーマとして挙げられている。

・英語教育という観点からは文化的・倫理的な配慮から省略がされたのではないかと考えられる。

・これらの場面(導入の、「子供に母親が諭す場面」と「ツバメと葦の恋愛の場面」)は、子ども達に英語教育するうえでは、不適切だと考えられたことから省略されたのではないかと考えます。

・前半部分を取っ払ったほうが「礼儀のいい」ツバメの他人を思いやる自己犠牲の気持ちが省略されるので都合が良い。

・「幸福の王子」のサブプロットであるツバメの恋の様子は原作を読めば心躍る部分ではあるが、教科書や児童向け教材のメインテーマである「自己犠牲」を強く印象づけるには、省略することも必要なかもしれない。

・時代のイメージや価値観のずれをなくすため。

・私は、「文化の違い」が、このお話を子ども向けに発信するときに省略される部分が多い理由であると思う。文化の違い、というと(中略)子どもたちが物語の内容そのものを楽しめなくなる恐れが出てくるし、文化を押しつけるような授業内容になってしまうと思う。

### 5-3. 考察

学生による意見を集約すると、物語の空白、つまり、「省略」の理由は、道徳的な観点を踏まえてテーマとして位置付けられている「自己犠牲」との関連性に概ね依拠している。指摘する箇所は異なるものの、子どもの理解への配慮と関係するという点から、教科書ではあえて、原文とは違う物語が構築されるに至ったという結果となった。

## 6. まとめ——教科教育における物語の役割

本稿では、教科書では取り上げられないことのない「空白」を手掛かりにして、原作から逸話の一部を援用しながら、社会的・歴史的・文化的背景を踏まえて、英語圏の文学作品としてのワイルドの短編を読み直す試みをおこなった。図 1 で示した 6 つの出版社の教科書のうち、光文書院(2023)は、「こころの うつくしい 人とは どんな人だろう」と問いかけ、あかつき教育図書(2023)は、「うつくしい <sup>はなし</sup>話を <sup>き</sup>聞いたり、<sup>よ</sup>読んだり した とき、どのような <sup>おも</sup>気持ちになりましたか」と触れ、教育出版(2023)は『『しあわせの王子』とは、どのような王子でしたか。そう思ったわけも言いましょう」と述べて、児童が本作を通じて考えを深めることができるように工夫を凝らしている。

実は、この作品を授業で扱ったとき、受講生はこの作品に原作があることや、教科書で習う物語の内容が改編されていることにだれ一人として気がついていなかった。確かに、向井(211-212)が指摘するように、『『幸福な王子』では、像やツバメがしゃべったりするなど、現実ではありえないとする事柄が描かれる』いわば、動物ファンタジーとなっているが、「ファンタジー」であるからこそ、読み手は現実と架空の世界との空間を自由に移動することができる。教科教育をおこなうとき、物語の「空白」部分は、もし一部でも原文の要素が残されていれば、想像力を働かせて、王子やツバメ、葦、その他の登場人物になりきって物語から感じ取ったメッセージを主体的に得て表現するきっかけを児童に与えることにも結びつく。

物語を教科指導にみられる「自己犠牲と、美しさ」から一歩離れた角度から捉えなおしてみよう。時代や文化の

違いに戸惑いながら、言葉でうまく表現できなくても、児童が「童話の広がり」と奥行きをまず楽しんで」（富山、1999）、読み、感じることができれば、「道徳科」で掲げられている主題〈感動、畏敬の念〉は、「よりよく生きる」ために自由な形で広がりをみせてゆくのではないだろうか。

#### テキスト

あかつき教育図書(2023). 「しあわせの王子」『小学生のどうとく 2』108-111.

学研(2023). 「幸福の王子」『みんなのどうとく』150-155.

教育出版(2023). 「しあわせの王子」『小学どうとく 2』124-127.

光文書院(2023). 「しあわせの王子」『小学どうとく 2』166-169.

Wilde, O. (1968). *The Happy Prince and Other Stories*. London, J. M. Dent & Sons. 1-12.

#### 引用文献

安達まみ(2011). 「19世紀イギリスのフェアリーテイル事情」『オスカーワールド研究』12, 日本ワイルド協会. 1-5.

浅見哲也(2017). 「道徳科における移行期間中の実践」『初等教育資料 10』文部科学省. 45-46.

浅見哲也(2023). 「目的意識をもち、自己の生き方を変える道徳科の授業」『初等教育資料 3』文部科学省. 40.

井村君江(訳),ワイルド. O.(著)(1989). 『オスカー＝ワイルド童話集 幸福の王子』東京, 偕成社. 332-333.

梅津義宣(1992). 『オスカー・ワイルドの短篇小説—モチーフ・構成・文体—』東京, 旺社. 18.

貝嶋崇(2020) 「英米児童文学—『幸福の王子』」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』6, 86.

川口喬一・岡本靖正(編)(1998). 『最新 文学批評用語辞典』東京, 研究社. 158.

久世恭子(2011). 「文学教材を用いた授業—大学の英語教育における事例研究—」『言語情報科学』9, 63-64.

斎藤兆史(2017). 「文学研究と語学学習—『ジェイン・エア』のバーサの表象に着目した授業案」原田範行・阿部公彦(編)『教室の英文学』(30-31)東京, 研究社.

曾野綾子(訳),ワイルド. O.(著)(2018). 『幸福の王子』東京, バジリコ. 新装版. 47-52.

富山太佳夫・富山芳子(編)(訳),ワイルド. O.(著)(1999). 『幸福な王子』妖精文庫 1, 東京, 青土社. 202.

成瀬俊一(2004). 「イギリス時代思潮」桂宥子・牟田おりえ(編著)『初めて学ぶ英米児童文学史』(22-23)東京, ミネルヴァ書房.

西村考次(訳),ワイルド. O.(著)(1968). 『幸福な王子』東京, 新潮社. 268.

橋口稔(1983). 『イギリス文学史』東京, 荒竹出版. 310-312.

原田範行・阿部公彦(編)(2017). 『教室の英文学』東京, 研究社. iv-v.

富士川義之(2013). 「愛他精神とデカダンス—童話をめぐって」富士川義之・玉井暉・河内恵子(編著)『オスカー・ワイルドの世界』(29)東京, 開文社.

富士川義之(訳),ワイルド. O.(著)(2019). 『ドリアン・グレイの肖像』東京, 岩波書店. 480.

富士川義之(訳),ワイルド. O.(著)(2020). 『幸福な王子 他八篇』東京, 岩波書店. 304.

三宅興子(1999). 「童話と幼年文学—象徴世界から幼い子どもの理論へ」『児童文学 12 の扉をひらく』東京, 翰林書房. 76-78.

向井秀忠(2010). 「『幸福な王子』における二つの世界と高い壁—オスカー・ワイルドの描くパラレル・ワールド」『フェリス女学院大学文学部紀要』45, 193-194, 211-212.

横田順子(2001). 「読者反応批評」日本イギリス児童文学会(編)『英米児童文学ガイド—作品と実践』(170-171)東京, 研究社.

光文書院(2000). 「小学校道徳教科書 ゆたかな心」<https://www.doutoku.info/plan1/view/395> (最終閲覧日: 2024年10月10日)

文部科学省(2018). 「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」東京, あかつき教育図書. 18-20.

Ericksen, D. H. (1977). *Oscar Wilde*. Boston, Twayne Publishers. 53, 60-61.

Wilde, O. (1989). "The Preface". *The Picture of Dorian Gray. The Writing of Oscar Wilde*. Oxford, Oxford UP. 48.

#### 謝辞

2024年度「英語文学と日本」科目の受講生のみなさまには、本調査に快く協力してくれたことに、こころから感謝致します。